命のとなりで

園長　野中　泉

緊急事態宣言の延長が検討される最中の５月末、大阪、高槻市からショッキングな死亡事故のニュースが飛び込んできました。持久走直後の小学５年生男子が倒れ病院に運ばれるも体調が急変して死亡。まだ事故の詳細は不明としながらも、ニュースやワイドショーではマスクとの因果関係を声高に叫ぶ報道が続いています。

アトム・つばさでは、いわゆるコロナ禍となったこの一年半、一度も園生活で園児にマスク着用をさせていません。小さな子どもたちにはマスクの清潔な取り扱いが難しいことに加えて、窒息や熱中症のリスクも無視できないと考えたからです。もちろん、参考文献も検討し、熟慮の末決めた決断ですが、それでも、この報道に「ほら、やっぱり、アトムはこの選択でよかった」と単純に思うことはできませんでした。

報道では、走り終わった男子児童の顎にマスクがあったことは確認しているが、走っている最中にマスクをつけていたかどうかはわからないと担任の証言を伝えていました。もちろん、実際の体育の授業の詳細は今後の検証がないとわからないことですが、でも、少なくともこの担任の指導は、個人の勝手な見解で行われたものではありません。国や自治体の指導の下作られた体育授業のガイドラインに、「体育の授業にマスクの着用は必要としない」ただし「児童生徒が着用を希望する場合は、マスクの着用を否定するものではない」と明記されているからです。担任の先生は、まじめにこのガイドラインに従ってそうしたのでしょう。

コロナの感染が怖くて走る時もまじめにマスクをしていたのかもしれない小学５年生の男の子の奪われた「命」と、まじめに上の言いつけを守っていたとしても重篤な事故が起これば、結局世間からの糾弾の矢面になる「現場」の辛さ。ふたつのやりきれなさが胸に刺さります。

いわゆるコロナ禍での保育園運営も２年目です。圧倒的に情報の少なかった未知のウィルスに何もかもお手上げだった時期を経て、今年度はコロナと共存しながらも、子どもたちに豊かな体験を保証していきたい、こんなことを大事にしたいという熱い話し合いが、昨年度以上に園のあちこちでされるようになって来ています。

感染症対策で守る「命」も命を育てる「保育」も、両方大事にしていきたい。緊張が続く現場で懸命に奮闘する仲間たちを守るとはどういうことか。様々なことを考え続けています。